はり姫と。
No.05 2023年7月1日発行
県立はりま姫路総合医療センター
地域連携だより［はり姫と。］ ――― 地域の医療を、ともにより良くしていく存在として

整形形成外傷センター
これまでとこれから

沿岸部分の大きな工場とそれを支える中小の町工場が多い、播磨地域。大きな工場では、爆発事故や高所からの墜落など重症外傷が発生することがあります。中小の工場では、機械の誤った操作などで手足を巻き込まれる怪我が発生することがあります。

また播磨灘を走行する船舶の上での労働災害事故も発生することがあります。市街地での交通事故だけではなく、山陽道、中国道の高速道路の交通事故では重症外傷が発生します。市街地を離れると山林が広がっているため、林業や農業の作業中の事故も発生することがあります。

現在の整形形成外傷センターは、新日鉄広畑病院の時代に、構内の救急に対応する医療機関から地域の救急を受け入れる救急機関に変貌していきました。

骨を治す整形外科 ＋ 軟部組織を治す形成外科 整形形成外傷センターのあゆみ。

2011 地域の砦の役割を担うように
当時外傷を受け入れる施設が少なかったなか、製鉄記念広畑病院への名称変更を機に、地域の砦の役割を担うようになりました。

2014 姫路救命救急センターオープン

2015 「外傷ほっとライン」を開設
クリニックからの整形外科単独外傷の直通電話での受け入れを開始しました。
▲ドクターヘリの運用を開始し、より広範囲からの救急患者さんを受け入れられるように。

2018 整形形成外傷センターを開設
整形外科医と形成外科医が互いに協力して外傷疾患の治療を進める体制を整えました。
▲姫路を含む中播磨の救急隊からも外傷ほっとライン受け入れを開始しました。翌2019年からは西播磨の救急隊にも受け入れ範囲を拡大し、岡山県境までをカバー。

2022 「はり姫」開院
整形形成外傷センター開設以来広畑病院閉院までに、1,398例の患者さんを受け入れてきました。

整形形成外傷センター

01

02

03

04

05

06

01. マイクロサージャリー（手術用ルーペや手術用顕微鏡を用いて微細な手術を行う技術）の治療の様子。／ 02. いつでも対応できる麻酔科チーム。「外傷に対する緊急手術の場合、生命予後と同時に機能予後を考慮する必要があります。これらにいつでも対応できるよう、常勤麻酔科医師が24時間365日院内に待機しています」（長江医師）／ 03〜06. いつでも手術ができる手術室チーム。「いつでも迅速に対応出来るように整形の器械は約50種類を常備しています。もちろん診療科の器機もですが。管理は看護師が担っています。麻酔科の先生やCEなど手術に関するすべての職種で協力して頑張っています」（山口師長）

外傷でマイクロサージャリーを用いた治療を積極的にしている施設ってほとんどないんです。（小川）

形成外科部長
整形形成外傷副センター長 **小川 晴生**

「みんなで患者さんを診よう」の文化が「はり姫」にも引き継がれています。（圓尾）

整形外科部長
整形形成外傷センター長 **圓尾 明弘**

圓尾　「はり姫」開院から1年余りが過ぎました。当初は民間病院から県立病院に変わってどのように勝手が異なるか不安でしたが、緊急手術への対応にしても、広畑病院のときと同様に、緊急性が高ければ他科の定期手術をストップしてでも対応していただいています。この規模の総合病院でここまで融通をきかせられるのはありがたい。麻酔科や手術室のスタッフには本当に感謝しています。

小川　形成外科のマイクロサージャリー術後はICUにお世話になるのですが、当該術後の診療経験が浅いICUスタッフはまだまだ多い。しかし、学習意欲が高いんです。熱心に勉強会をしていますし、ただ指示された処置をするだけではなく、わからないことがあれば積極的に「教えてほしい」と医師にコミュニケーションをとってくれます。

圓尾　入院患者さんのなかには、整形の患者さんはわりと高齢者の方が多く、かなりの割合で合併症を複数抱えていらっしゃいます。広畑病院時代は、たとえば心臓に疾患をお持ちの患者さんの手術に困ることもありました。それが「はり姫」では循環器内科の医師に声をかけたら適宜フォローしてくださるので、非常に助かっています。

小川　院内全体が同じベクトルを向いている雰囲気を非常に感じますね。

圓尾　「みんなで患者さんを診よう」の文化は、しっかり「はり姫」にも引き継がれていると思います。

小川　手術環境はハード面でも、形成外科手術用の顕微鏡の購入など「はり姫」になって向上しました。

圓尾　四肢外傷の場合、骨のまわりの皮膚や筋肉などの組織も壊れているケースが多い。整形外科は骨を治すことに専念して、傷んだ軟部組織の治療、マイクロサージャリー（手術用ルーペや手術用顕微鏡を用いて微細な手術を行う技術）で血管や神経を縫合する高度な技術が必要なときは形成外科にお願いしています。

小川　「はり姫」の整形外科は深部組織の感染コントロールを得意にされているので、僕らもストレス少なく手術ができます。施設によっては、整形側で感染コントロールできていない状況で形成に「とにかく塞いでくれ」と依頼があったり、整形と形成の医師同士の見解が噛み合わないといった話も聞きます。

圓尾　我々は2015年頃から整形外科・形成外科で症例の振り返り会議を定期的にやってきて、うまく連携を図れていますね。たとえば腕がちぎれた患者さんの場合、血管や神経の縫合はスピード勝負。5〜6時間で組織が死んでしまうので、麻酔科の医師や手術室スタッフの迅速な協力も欠かせません。

小川　外傷でマイクロサージャリーを積極的におこなっている施設自体が珍しいです。兵庫県西部では「はり姫」だけではないでしょうか。形成外科には外傷に興味がある若手医師が多いので、医療圏を超えてマイクロサージャリーの教育にも力を入れていきたいですね。